

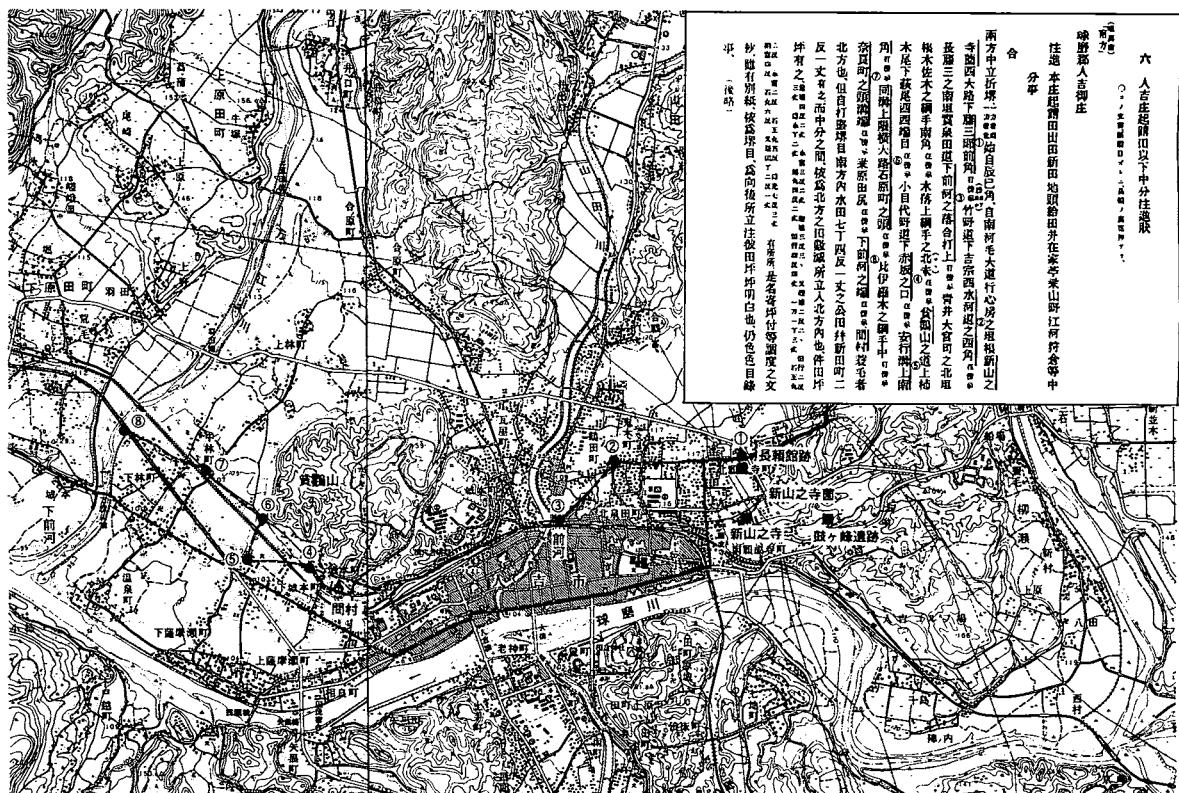
付 論

「人吉庄の下地中分について」

村 上 豊 喜

蓮花王院領人吉庄は寛元四年（1246年）、地頭職の下地中分がなされて北方は北条氏、南方は相良氏が支配することになる。本稿では、推定を混じえながらも、その中分の現地比定を行ってみたい。史料は「人吉庄起請田以下中分注進状」（『相良家文書』）である。

まず中分の起点は「辰巳角」であるから南南東である。ここは「河毛」とあることより、球磨川である。そして「大道」が南より北へ向かい、恐らく願成寺の坊である行心房の垣根に沿い、新山（現在願成寺の裏山に新山不動がある。）の寺蔵を経て、西の大路とであう。ただし、長瀬の居館跡と推定されている地は現在の変電所の前の地であるので、この地は南方に入らねばならぬので①地点を北東の角としたい。次に「傍示在」とされた地点は、西に「水河」があるので、大路と鬼木川がおちあう地点の②としたい。そして中分線はこの鬼木川に沿っていき、泉田からの道と山田川があい、更に対岸には「前河」（万江川）の旧河道が山田川に注ぐ「落合」の③に傍示が打たれている。山田川を渡った中分線は恐らく「貧鶴山」（現在の大村台地）の南の渓をいっていたであろう。「木落」は現在でも台地の下に字名として残る。ところが、「間村蓑毛」は北方となっており、間のみが大村台地の南側では北方に属している。しかも「赤坂之口」とあることより、台地への登り口の点に傍示が在ったことより、④を推定したい。ここから、中分線はしばらく台地の端をはずれるが「安行溝」の南に達する。したがって、現在の福河を「安行溝」と考えると、ほぼ⑤に傍示が打たれたと考えてよい。そして今度は「安行溝」を北上、横から大路が来る地点⑥を推定できる。そして「奈良町之頭溝端」とあることより、現在も一部溝が残る中林の集落に⑦の傍示を求めてよいであろう。最後が「下前河之端」であることで⑧としたい。ただし万江川の河道は現在とは必ずしも一致するものではなかっただろう。



第186図 人吉庄下地中分の傍示推定図